

69回目の沖縄慰霊の日

軍隊は住民なんか守るわけないさー

沖縄のおばあ言葉

組織的戦闘後に増す悲劇

1945年3月から始まった米軍の沖縄上陸は「鉄の嵐」といわれ壮絶極まりないものであった。6/23に司令官牛島中将の自決で日本軍の組織的な戦闘は終結した。しかし降伏を拒否した軍人らによる局地戦が続いた。米軍の侵攻により南部に後退する日本軍は、逃げ惑う住民が隠れていたガマ（洞窟）から住民を追い出し砲弾の雨降る中につきはなすなど敗走する日本軍は常軌を逸していた。そのような異常な状況は非戦闘民、年寄りや子供などの犠牲を多く生んだのである。

米軍に投降を許さず背後から日本軍に撃たれるとゆうようなこともあり、住民は当時をふりかえって二つの戦争と闘ったと回想している。だから沖縄のおじい、おばあは軍隊なんか信用できないと断言する、「アメリカもヤマトもみないっしょだ」

集団的自衛権は自衛なんかではなく戦闘準備

いま集団的自衛権行使が安倍政権によって進められている。何がおきてもいいように準備をするという。何か事が起きてからでは遅いと彼らはゆう。「何か」とは戦闘のことなのだ、いざことが起きれば自国の軍隊は住民より国を守ることを、沖縄戦が教えてくれている。沖縄のおじい、おばあは知っている。軍隊は守ってくれなかったことを。

与那国、八重山、渡嘉敷、石垣など南の美しい島が国境の端となって戦闘に真っ先に巻き込まれるのである。

敬礼のすきな大都市の某元都知事による何も考えない言動が、今の状況を生んだといえる。彼は決して戦闘の最前線には行かない。真っ先に犠牲を強いられるのは国境の島々の人たちではないか。

へいわってすてきだね

今日6月23日「沖縄慰霊の日」の式典で6才の安里有生君が「へいわってすてきだね」と題した自作の詩を朗読した。「みんなのころから、へいわがうまれるんだね」とメッセージをおくった。

参列していた安倍首相のころにへいわはめばえたのか